



図8-7 上西校区の位置

第二章 上西校区

第一節 上西校区の概要

上西校区は、本市の北西部に位置し、校区中央部には山稜が広がっており、校区西部は東シナ海に面し、大崎港・花里崎港を有する。海岸沿いの集落では温暖な気候を活かして、スナックプエンドウやソラマメなどの園芸や花卉栽培が行われている。山間部では和牛や乳牛生産が営まれている。北から大崎・花里崎・大花里・池之久保・栢之峯・横山の六集落から成り、人口は四五六人である（令和五年〔二〇二三〕十一月末現在）。

第二節 上西校区の成り立ち

江戸時代、元禄二年（一六八九）には、現在の西之表市は七つの村によって成立していたことが『懷中島記』に記されている。

- 一、西面村
- 二、国上村
- 三、安納村
- 四、現和村
- 五、古田村
- 六、住吉村
- 七、安城村

西面が西之表に変わったのは、江戸時代後期と考えられる。上西は西面村に属し、『種子島家譜』には「上西之表」と記載されている。『種子島方角札帳』に「上西ノ表花里浜」などの記述があり、下西に対する呼称であることがわかる。現在の上西という名は、廃藩置県の際につけられた。



花里浜海岸

第三節 地名・字名

一字名

塩屋・天水・大崎・西ノ小田・大広野・小広野・火立ノ峯・大餅田・小餅田・中ノ丸・燕雀・椿嵐・花里崎・塔ノ脇・濱ノ田・鳴子小田・轟・大川・花里田・待崎・一之鳥居・神ノ園・息長野・大迫・御手洗・岩穴ノ上・深堀・八頭・野都牧・柏木田代・猿獅・榎迫・長迫・猿獅小田・葛松・穴野・屋所・佐保・荒平・下ノ平・大峰尾・直ノ川・上小菅・下小菅・酌善・黒石が田尾・出所・堀ノ木・石之有路・牧山・平松・伊勢生・下榕山・馬不騎・上立切・下立切・大榎・上榕山・高牟礼・横山田・麦嵐・大入野・内ノ田・中ノ宇都・無方ノ頭・長久保・河安余り・御前開・鬼ヶ澤・鬼ヶ澤山・堂ノ渡瀬・大中山・丸野・上瓜生迫・下瓜生迫・火焚松・車門・土石坂・下唐人が山・上唐人が山・杉ノ方・山ノ小田・川頭・牛首・馬込・栢木・尾細利・峰ノ園・上古藪・上ノ住吉・山住・大宮田・與七郎・横山・櫻ノ峰・深田・上ノ原・長山・平・一橋・長山平・狭渡瀬・蕨ノ平・池ノ小田・榎田・下五葉松・下長野・上蘭牟田・井手ノ本・射場ノ本・狩集・上五葉松・上長小田・藤七渡瀬・上五本松・鯨畑・上榎ノ細り・松ノ隅・白地山・屋敷ノ平・佛ノ峰・満徳寺・榑ノ木小田・上野別府・下野別府・正建田・成水・石ノ峯・馬牛平・深渡瀬・栢ノ峯・堤・白崩・池ノ

久保・由利佐・田本・経ノ峯・松原・馬場

二地名

大崎

西之表から大崎集落を眺めると（特に板敷鼻の付近）、雄大な景色であるということで「大崎」と名付けられたのではないかと言われるが記録がなく、はっきりしていない。

花里崎と大花里

池之久保集落の牧山克郎氏によると、花里をケリと呼ぶのはケロから転化したものだという。「ケロとは狭い平地のこと、又は薪などを採る共有地でもある」とは地名学者の鏡味氏の意見である。花里方面は東側から山が迫っており、田畑の面積は確かに広いとはいえない。山間の田圃や西側の畑が細長く広がっている。

池之久保

池之久保公民館の北側に杉林がある。牧山氏によると、ここには昔、池と井戸があった。「久保」は「窪み」のことを指す。池の周辺には池口家、その上と下にはそれぞれ池上家、池下家が姓を名乗り、居を構えている。ここを中心にして池之久保集落は広がったという。



樺（樺）の木

樺之峯

一九代島主種子島久基（柗林様）がこの地に樺（樺）の木を植えさせ、製蠟所があったことから地名がついたと言われている。昔はこの地は樺の木ばかりで、実の収穫が四、五俵ある人もいた。久基（一六六四〜一七四一年）は薩摩藩の家老職を務めながら種子島の産業振興に尽力した。樺は製蠟のために植えられたもので、種子島に樺の木が多いのはそのためである。

第四節 歴史的特殊性

一 比志島國隆と阿久根千代女

横山神社の本殿に向かって左に、比志島國隆と阿久根千代女の名を刻んだ供養石が建てられている。

比志島國隆は薩摩藩日向国家老だったが、悪政をなしたという理由で一八代藩主島津家久の怒りを買って、種子島に遠島となり、横山に住んだ。五味（一九七〇）によると、國隆は藩境の牛之峠で飢肥藩が船材を切り出すことに対して阻止指令を出し、責任は自分一人が負うと公言。藩を危機に陥れても意に介さないという身勝手な言動が藩主や首脳部から弾劾されたのである。当時は徳川家光が幕藩体制を確立したばかりであり、幕府は藩の紛糾に目を光らせていた。そのような政治情勢の中で島津と近かった福島正則らの改易は藩主らに衝撃を与えた。ここで島津藩が飢肥藩と争いを起こせば藩の存続に関わる問題が表面化するとして、計を先んじて國隆を処罰したのである。

寛永五年（一六二八）二月、家来とともに種子島で謫居される。このことを阿久根の地で伝え聞いた愛妾千代（阿久根中將・阿久根千代女）は國隆に会いに行くことを決心し、阿久根から坊津へ。坊津で種子島に帰るといふ漁師とともに丸木舟で種子島に渡った。國隆が阿久根地頭の折、才色兼備の誉れ高い千代女は見染められ、これ以来、千代女の思いは愛情へと深まった

のである。

横山でやっと会えた二人であったが、このことが藩に漏れ伝わり、罪を償う身でありながら女と遊び暮らしているとの理由で、國隆は切腹を命じられる。千代女の悲しみは深く、國隆のいない世は己も死んだのも同じとの思いで、國隆にそなたの手で冥土に誘ってもらいたいと願い出る。國隆はこれを許し、先に千代女の首元を刺し、次いで自らも自刃する。秋も深い十一月晦日のことであった。時に國隆五一歳、千代女三五歳であった。横山での二人の生活は僅か一〇カ月であったが、罪と死が隣り合わせであったがゆえにもっとも光り輝いた期間であったろう。

あれから三九〇年余り。横山の人々は二人の心情を哀れみ、毎年七月の第二日曜日に供養の盆踊りを行う。

二 大広野の人々

大広野は、かつて火立の峰で烽火を上げる役人の集落だった。現在、僅か九戸の集落である。『律令』の軍防令によると、「凡そ烽には、長二人置き。三年に一たび替えよ。交替の日には新人を教へて通ひて解らしめよ。凡そ烽には各烽子四名配てよ」とある。火立の峰で最も高い一一七畧の山頂で、二四歩（一步は約一・八畧で約四五畧）四方の囲いを作り、乾燥した葦の束を芯にして烽火を上げる。烽火を上げる設備関連の補修には烽火が必要のため、六人が三年間で交替するのである。

集落は火立の峰の麓

にあり、付近には畑が細長く広がっている。その下方には海岸を挟んで細長い水田が僅かにある。集落の人々は烽火を上げる役人であり、給与もあるがとてきないため、人々は田畑を拓いて生活をしていたのである。

火立の峰の頂上から

すぐ北に国上野木平の国見山、海を隔てて大隅の国府。南には住吉の火立が峰、島間の火合ノ峰。さらには海の向こうに屋久島。昼間は白煙で、夜は火焰で知らせ、天気が良いれば大隅国府から屋久島まで一時間あまりで伝えられたと考えられる。

『西之表市の民俗・民具第一集』によれば、集落の人々は昭和四十年代まで穂垂れ引きと天道、すなわち太陽に感謝する天道祭を行っていた。祭祀に使う山びわの木の箸二本は天道の箸といい、上部に×紋の割りを入れる。これは▽△を表す。火立の峰の頂上に山石で一辺八二畧の正三角形に配置してあるが、これは火の神や太陽を象徴する聖山の印である。×紋は火立の



穂垂れ引きと天道祭（下野敏見氏撮影）

峰が聖山の印であることと一致する。大広野は太陽信仰の熱心な地だったのである。

三 絹浅黄色袂付袖煎帯付亀附石三ツ鱗紋裏付童着晴着

二三代島主種子島久道が幼少のとき、大崎塩屋（製塩業）の養い親である平原家に預けた晴着と思われる。種子島家の家紋三ツ鱗紋が両胸、背、両袖口に入っている。色あせてはいるが、おそらく当時は鮮やかな浅黄色であったろう。絹製品で、両袂には厳めしい表情の亀が描かれており、制作者の童着への思いが忍ばれる。

戦前までは種子島家島主の世継ぎに体の弱い子が生まれると塩屋に養い親を頼む習わしがあった。久道の養い親である平原家では毎月一、十五、二十五日には衣を床の間に掛け、大崎塩釜神社へ参拝したという。塩の持つ力で、遠く離れて生活する

鹿兒島での若君の健康を祈った。



種子島久道幼少時の童着



アコウの大樹の下で
(昭和42年、大広野)

第五節

移

住

上西校区には、集団での移住は行われなかった。

第八節 戦争と疎開

昭和十六年（一九四一）十二月八日に日本軍がハワイ真珠湾を襲撃したことで太平洋戦争が勃発した。昭和二十年四月から疎開が始まり、上西国民学校の小学二、六年生までの児童一五五人が大口平出水校区へ疎開した。

疎開先では平出水の各家庭が児童を受け入れた。疎開経験者によると、よく働く上西の子を我が子以上に大切にもてなしたという。

終戦後は疎開計画そのものが消滅し、かつ帰還兵を受け入れるべき家庭や公民館が校区中央付近に多くあったため、疎開児童はかつての受け入れ家庭を離れて平出水小学校の近くで指導員の大人と協力して建物を立て、集団生活を始めた。種子島へ帰るまでの七カ月間は、食料難が児童らを苦しめた。ひもじい思いでイナゴを捕まえて竹串を刺し、火であぶって食べたり、人の家のスイカや柿を盗んで食べたりすることもあった。米軍戦闘機からの機銃掃射があるときは、建物から離れて一斉に山の方に逃げ隠れた。

一方、花里崎集落出身の児童だけは平出水校区周縁部が受け入れ家庭であったため、そのままの生活が続いた。

そして十月。疎開生活が終わり、種子島へ向かう船はエンジンの不調があり、多くの児童が死を覚悟したという。無事に親元に帰り着いた児童らは、どんな思いをもったのだろうか。

第七節 人物

久保平内左衛門之正

花里崎公民館の敷地に見事な石碑がある。高さ一・七メートルの石碑には、「久保之正先生謫居地 正二位侯爵 西郷従徳書」とある。

従徳は西郷隆盛の甥にあたる。裏面の「先生通稱平内左衛門文化五年……」で始まる漢文には種子島に流罪になった理由やここで生涯を終えたこと、この地で日新公（島津忠良）の伊呂波歌の意味や意義を教え、かつ自らも伊呂波歌を人生訓として誠実な生き方をしたことが書かれている。島津家二五代当主重豪の時代の借財を返すため、長男の二六代当主は財政改革を推し進めたが、その方法が重豪の怒りを買う。齊宜は隠居を命じられ、その家臣は

切腹、流罪などの処分を受ける。その数は百余名にも及んだ。いわゆる近思録崩れである。流罪になった一人が久保之



久保之正謫居地の碑

正である。久保之正は示現流の達人であり、かつ藩内随一の経済学者でもあった。

地元の人たちは久保のことをよく慕い、没後は地元の墓地（大花里）に丁重に埋葬された。

朝山治右衛門高重の墓

朝山治右衛門高重は、日向国佐土原の家老であったが、藩主継嗣問題の責任を負い、宝永二年（一七〇五）、横山に配流となった。高重の娘は父の身を案じ、ご禁制であったにもかかわらずに供を願ひ出た。すると親孝行の心が認められ、藩の許可が下りた。高重は文武両道に秀でており、横山の人々を熱心に教育し、信望も厚かった。享保二年（一七一七）に亡くなった後も娘は



朝山治右衛門高重の墓碑

その地に残り、墓を守り通した。

第八節 年中行事

火入れ祈祷（大崎）

『種子島家譜』に「始めて塩竈を建つ。第一は西ノ村の立石、第二は国上村の湊。或いは云ふ。第一大崎、尼泊、第二久志瀬戸、竹之川」とある。大崎は製塩業の草分けの地である。種子島に初めて製塩技術が伝えられたのは文和年間（室町時代）である。六代島主時充の時代で、貝太郎・貝次郎・貝五郎の三人兄弟が伝えたとき、大崎には三人の子孫と称する大崎家・塩崎家・平原家がある。

塩釜は竹を網状に編み、石灰で塗り固められた大きな網代釜で、鎌倉式製塩法であった。できあがった釜に海水を入れ、一昼夜かけて焚き上げる。初めて火を入れるときは往々にしてひび割れて釜が落ちることがあった。それを避けるために火入れ祈祷が行われた。火入れが始まると連日連夜焚き続けなければならない。もし中断しようものならば、たちまちひびが入り、釜は崩れ落ちる。そのため輪番制を組んで火の番をする



塩屋の神、天照大神を祀る大崎塩屋神社

などは総動員体制である。こうしてできた塩は二石二斗五升(約二二五升)もあった。まずは島主に届け、残りを地元民で分けて生活の必需品とした。火入れの途中も、火を引いた後も塩屋の神に祈禱をする。また、正月には釜祈禱としてにぎやかに執り行われ、それは現在も続いている。

下野(一九八三)によれば、大崎の製塩業は明治三十三年(一九〇〇)に終わった。釜跡より一段高い場所に現在の社殿を建て、大崎塩屋神社を中心に氏神・釜司の組織を運営しながら、先人の思いを現在も受け継いでいる。

弓場祭(杵之峯)

本市街地から国上西之表線を北に向かい、馬込の坂の麓に杵之峯集落がある。この集落では弓場祭が行われる。冬の寒さも峠を越した頃の二月下旬、力強い筆致で「弓場八幡」と書かれた題字を掲げた社殿で宮司を招いて祭典を行う。

祭祀後は神社敷地の東に位置する弓場で、宮司による射芸が執り行われる。弓場は一段高く土が盛られて造成されており、長さは二〇^{メートル}ほどである。弓場には高さ一・二^{メートル}、幅〇・八^{メートル}の将棋の駒形に近い石塔が二基置かれている。宮司は正装で石塔の前で祝詞を奏上する。それが終わると、ついに射出である。藁を巻いた俵の円形面に蛇の目文様の的を当てる。この的の前には縦二五^{メートル}、横一〇^{メートル}ほどの杉板が一本の竹棒に挟まれており、これは破魔板である。さらにその手前一^{メートル}ほどの場所

には結界を表す竹の囲いがしつらえてあり、射手は結界の外で射る。

宮司が烏帽子を脱ぎ、上着を丁寧に折りたたむといよいよ「離れ(＝射出の瞬間)」である。パシツという心地よい響きが届いたときには破魔は割れ、すでに的は射抜かれている。矢は三本使い、

三本とも射抜かれて射芸の終了である。割れた破魔板に千切った紙的を巻いて、観客全員に手渡す。日常の厄災を弓矢の力で打ち破ることで魔を破り、諸々の災難を祓い清めて家内安全を祈るのである。

上西で行われる弓場祭は杵之峯だけである。種子島家代々の墓地に隣接する栖林神社で執り行われる大的始式の流れをくむ弓場祭は、島内各地の弓矢八幡神社で毎年行われる。

種子島家のしめ縄由来(横山)

種子島家の門木のしめ縄は一般のものとは少し異なる。七本ずつ七垂れの藁筋を垂らし、橙の下には茅で編んだ鳶の巣を編み込んである。



弓場祭(芝宮司による射出)



種子島家のしめ縄「鳶の巣籠り」

このしめ縄は横山の園田家が年末に毎年作って差し上げる習わしである。『ふるさと歴史散歩』によると、園田家は島主の先祖が初めて入島したとき、農業の専門家として同伴してきた家であるといわれ、正月十一日の大的始式にはかがり火を焚いたりもする。

鳶の巣の由来は、島主の先祖（平信基であろう）が野宿したとき、鳶が飛来して松の木に巣を作り、その下で休んだというおめでたい故事にちなむものといわれる。園田家では大晦日の前の晩に門木と鳶の巣のしめ縄を持ち、誰にも会わないように注意して島主家に行く。人に会うとけがれるというのである。鳶の巣の実際の役割は、万が一にも橙が下に落ちることのない

ように受け籠を準備しているようなものである。昔の人は縁起を異常なほどかたぎ、落ちるといふことは島主家が極端に嫌ったであろうことから、そうした背景のもとに作られた鳶の巣のしめ縄である。

第九節 伝 説

不思議な酒樽（大崎）

大崎集落の外れに天照大神を祀る塩屋神社がある。その境内には自然石を利用した亀が向かい合って置いてあり、興味を引く。大崎は明治時代まで製塩業を営む集落で、塩の増産を天照大神に祈っていた。

ところでこの塩屋神社にはおもしろい話がある。明治の終わり頃、神主が早朝参詣するために神社の前の海辺にシユエイ（潮井）を汲みに行った。シユエイは神主がマサゴ（小石）を拾い、身体に海水を振りかけて参詣するためのものである。少し沖の真つ平の石に一尺周りくらいのきれいな樽が座っていた。これは不思議なことじゃと思つて拾ってみると、墨字で「奉納天照大神長崎樺島村杉田増次」と書いてある。開けてみると御神酒が入っている。神主はあきれた。長崎県からどうして来たかは知らぬが、天照大神が祀つてある神社の真下のシユエイ取り場に流れ着いているのだ。

さっそくこのことを西之表の神官に届けると、「それは珍しいことだ。これを機会に大きく取り上げねばならぬ」という意見も出され、樽は神社に永く保存されることになった。神官は長崎の杉田増次に手紙を送った。するとさっそく返事があって「自分は重病にかかりもうろうとして何日か過ごしていたら、

ある晩、白髪の老人が現れ、天照大神を信仰すればおまえの病気は治ると告げられた。不思議なことがあるものだ。海水の力でどこかで奉納してくれるだろうと思ひ、酒樽を数個作って海に流した。これが種子島大崎の天照大神に届いたのであった。実はその酒樽が届いたところには自分の病気は治って、今は元気に働いている」ということであつた。

かね浦（大崎）

かね浦は大崎にある。『ふるさと歴史散歩』によると、明治十年頃、三菱造船の船が瀬に乗り上げて難破した。その時は大崎の若者たちが沖まで泳いで行き、ロープをくくりつけて乗組員を救助した。この船には中国人もたくさん乗っていた。彼らは大崎塩屋神社の前の家を借り、六カ月かけて難破船を解体した。宝永七年（一七一〇）八月二十九日にも異国船が大崎に漂来している。『種子島家譜』に「小船數十を以て赤尾木港に曳航す」とある。

また文政七年（一八二四）には『種子島家譜』に「大崎の洋に異国船来る」として全長三〇間（五四^ド）ばかり、帆柱三本、布帆数十を張った船が来たとある。イギリス船であつたよう
で、鉄砲を撃ち、家来どもを城中に集めた。そのとき、大崎塩屋の釜司がやってきて「異国人七人が小舟に乗って大崎に来た。塩戸のところをうろついている。顔は真っ赤で言葉は通ぜず。小魚とカライモをやったら喜んで受け取った。向こうからその

礼にパンとナイフをくれた。その姿は普通の人間とたいへん異なっている」と伝えた。そこで万が一の場合を心配して、一番組の諸士七十余名は大崎に行つて守つた。二、三番組の侍たちは慈遠寺に集まつて、控えていた。一方、三カ寺の僧徒はお経を唱えて海賊退散を祈つた。また全島の横目、郷士、足軽にも命令して、異国船の見張りをしっかりするよう伝えた。イギリス船は十六日に現れて、十九日にはどこかへ去つてしまつた。こんなできごとからも、物々しい警戒ぶりが目に見えるようである。

大広野の氏神（大崎）

『ふるさと歴史散歩』によると、広野の氏神（馬頭観音）の床下に曼荼羅が落ちていたのを大崎のある人が拾つた。それが浦田御崎の馬頭観音のものであることがわかつた。奥集落の人たちは、大崎の人が盗んだのだろうと大変な剣幕だったので返した。ところが白馬が氏神の階段を二段か三段か上り、くると向きを変えて村役の河口氏の家の木戸を通つて玄関まで走りこんできた。

後でわかつたことだが、この白馬の足跡がずっと先のサルシの坂を通り、国上に向かつていた。巫女にこのことを尋ねると、大広野に祀られたいという神のお告げとのことであつた。そこでお宮を新築し、もともと大山祇神（山の神）を祀っていたのを明治十年（一八七八）に、受母知神（食物穀物の神様）と合

祀した。

サルシの坂の目一ツ五郎（花里崎）

西之表から花里浜を左に見ながら花里崎に入ると、緩やかな坂道の峠で三叉路になる。右手は国上、左手は大崎に至る。その国上線は急峻な坂が続いており、その坂を「サルシの坂」という。『ふるさと歴史散歩』によると、坂の名称は、西南西に申の風をまともに受けるという意味である。坂を上ると、昔津波があつたときに鍋のつり（取り柄）がひっかかっていたといふことから「つりかけ」と呼ばれる大岩がある。ここは花里崎で一番高いところに位置し、すばらしい眺めである。ところが、この坂には妖怪が出るということで、たいへん恐れられていた。ある日、状持ち（郵便配達員）が夜中に通つたら、ヨゴ松の川から人が出てきてうろろしていた。そして「お前はどこに行くか。一緒に行こうじゃなかか」と誘いかける。状持ちが急げば向こうも急ぐ。ゆっくり歩けばゆっくり歩く。花里崎のサルシの坂に上るキリドーシというところで状持ちが振り返つたら、ヘッドライトのようなものがピカッと光った。腰を抜かさんばかりの状持ちは、ほうほうの体で国上にたどり着いた。それが目一ツ五郎という妖怪であつた。

柵之峯のこと（柵之峯）

一九代島主久基（栖林公）は、家来に命じて慈遠寺に生えて

いた二本の柵の木の枝を取らせ、各地に接ぎ木を広めさせた。柵の実からできる生蠟は、米の次に重要な輸出品で、高価で貴重なものであつた。その製蠟所が柵之峯に造られたことから「柵之峯」の地名になつたと言われている。

ガローになつた泉（横山）

横山集落の東側には泉がある。『ふるさと歴史散歩』によると、昔からこの泉には大きなウナギが二匹いると言われていたが、一匹はしつぽがなかつた。

ある日、阿久根千代女が泉に野菜洗いに行つたら、大きなウナギが出てきた。驚いたはずみで千代女は持っていた包丁でウナギを切つてしまつた。それからこの泉にはしつぽのないウナギが出てくるようになったという。集落の人々は時々、総出で泉の掃除をしていたが、そのときは決まつてしつぽのないウナギが現れて水の湧き出る穴をふさぎ、カワ替えの加勢をした。ところがこのウナギを取つて食べた人がいた。その人はまもなく死んでしまつた。

それ以来、この泉はガロー（古くから神聖な地として崇め奉られる場所）になつた。土足で入ることも近場の木や草を切ることも禁じられた。もしこれらを破れば、たちまち祟りがあつたという。

第一〇節 神社・仏閣

伊勢神社（大花里）

藩政期に島の総鎮守とされていた伊勢神社は平成二十八年（二〇一六）、伊勢神宮第六二回式年遷宮の際に古材三十六本を譲渡され、神明造りで建て替えられた。以来、初詣には四〇〇〇人を超える参拝客が訪れる。

『伊勢神社縁起』によると、一七代太守島津家久の娘が種子島一七代島主忠時に嫁がれた折に従者として緒方惟貞は、かつて父惟治が鵜戸太夫に請い、拝戴した御神鏡を持って来島した。そこで同僚と協力しながら成高山（現在地）に小祠を建てて祀ったのが伊勢神社の起源である。寛永十八年（一六四一）のことである。その後、島主久達の娘永照院はことのほか信心が厚く、祭祀を行うほか副鏡を献納した。また二二代島主久照は社殿を改築し、境内も整えた。このようにして伊勢神社は現在の形に近づいていった。

田の神様（大崎）

自然石を生かしたこの田の神様は横幅八^{メートル}、高さ五^{メートル}もある巨岩である。大崎は漁業が盛んで、明治三十三年（一九〇〇）まで製塩業を行っていた。毎年三月の春祭りで役員がこの岩に登り、米・塩・焼酎を捧げ、祈願成就の札を立てる。この祭り



初春の伊勢神社社殿



大崎の田の神様

は、昭和三十年代まで続いた。

大広野神社の銅鏡（大崎）

大崎には神社が二社ある。大崎塩屋神社と大広野神社である。大広野神社は県道から奥まった場所にあり、あまり目立たないが、平成十四年に驚きの発見があった。それまであまり世に出ることはなかった銅鏡五面が発表されたのである。下野・橋口（二〇〇三）によれば、そのうち「小型海獣葡萄鏡」は最大で直径九・一三^{センチメートル}、厚さ七・四^{センチメートル}、重さ一七七^{グラム}。奈良時代



小型海獸葡萄鏡

に中国から伝わった銅鏡を複製して日本で作られたと推察される。

大広野は古代の烽火の場所につながる火立が峰に近く、烽火係の居住地であったといわれる。地元で小正月の行事として稲作儀礼が行われるが、その中に天道祭が見られることから、大広野は火の神、すなわち太陽信仰が代々受け継がれてきたのかもしれない。

この時代、鏡は位の高い人に授けられたと考えられており、この頃は多櫛国（七〇二〜八二四年）が存在した時代であることから、京と何らかの関係があると考えられる。大広野神社の御神体として、いにしえより伝えられていたのだが、いつ、どのようにして伝わったのか現在のところ不明である。実物は現在、種子島開発総合センターに保管され、銅鏡に代わる御神体は神社の祠に奉納されている。

弓矢八幡神社（柵之峯）

長野家に伝わる『弓矢八幡神社縁起』に次のようなことが記されている。

柵之峯に長野某と呼ばれる人がいた。生まれつき豪胆で努力

家であり、幼少のときから弓術に親しんでいた。あるとき大始式を見て、感銘を受けた。そこで弓術を極めるために鶴岡八幡宮に赴き、その極意を会得したいと決心した。長野は海を渡り、相模国鎌倉鶴岡八幡宮の宮司に願い出て弓術の鍛練を行い、ついに分霊の式を挙げ、神鏡一面を授かることになった。柵之峯に戻った長野は祠堂を建てて神鏡を祀った。その近くに弓場を構えて日々鍛錬に努めた。その様子に村人は感じ入り、祠堂を鎮守の神として神社を建てたいと村人全員が長野に請うた。長野が言うには神社とはもともと先祖の祀りのためであるもので、村人と祭祀を盛んにすることは自分の望むところだと応えた。この言葉に村人は大いに喜び、弓矢八幡神社と称して神社を建てた。

時は下り、上西の氏族が弓場に鉄砲を持ってきた。引き金を引こうとしたそのとき、しっぽのない大きな蛇が的の上を通った。それ以来、弓場では銃の射撃を行わないという。

阿久根中将之碑（横山）

横山神社社殿左に阿久根中将墓碑と比志島國隆墓碑が並んで建っている。明治十七年に江戸時代から明治にかけて活躍した歌人田上青山の手による阿久根中将碑文はかくのごとく美しい文章で飾られている。

中将（は國隆の）後を慕ひ 夜ひとり小舟に棹さして 八重の塩路をしのぎ 終に（中略）中将 悲しみて自ら刃に



「愛しい人のもとへ」紙芝居の一場面

伏し 三十五歳にして
夕の露と消にけり

ここで言う中将とは武士階級の人々による呼び名であり、地元の人々は千代もしくは千代女と呼んだ。全文漢字平仮名交じりの文は字体も美しい。

時代は下り、寛永五年（一六二八）國隆と千代女は非業の死を迎える。それから一五五年後のこと、國

隆の末裔にあたる國統が二人の死を悼み、墓碑を建てる。墓碑銘には、かつて國隆の愛妾であった千代女のことを「妻千代」と記してあることが注目される。國隆は千代女を同じ墓に埋葬するよう遺言したと檜原長周作の阿久根中将碑に記されている。

阿久根千代女の墓（横山）

横山神社の境内から東に三〇〇ほど離れた丘の上に位置し、高さ約一畝の自然石で文字は記されていない。制作者不明。現在は長野友喜氏が墓守をしている。現在で七代目である。

日蓮上人供養
碑（横山）

横山神社の境内にある。高さ

二畝を超す見事な石碑が二基並んで立つ。左は「天明元年（一七八一）」、右は「天保二年（一八三一）」と記されている。



阿久根中将碑

阿久根中将碑（横山）

横山神社境内にひとときわ高くそびえているこの碑は土台からの高さ三畝もあり、石碑としては一流級のものであり、威厳さえ覚える。大正元年（一九一三）に建立された。『種子島碑文集第一集』によれば、中将の半生とその後を漢文で記したもので、こちらは阿久根中将之碑と比べて、より事実に基づいた内容になっている。檜原長周謹書、前田宗成（豊山）謹撰。

佛ノ峰の供養塔（横山）

この供養塔は風化によって解説不能な文字がいくつかあるが、田上義福の手による記録書ともいえるべき『満徳寺縁起』には次のようなことが記されている。



佛ノ峰の供養塔

享保十六年（一七三二）、島主第十九代日等久基公が自ら自我偈（ジガケイ）の功德を讃える経文（を三千巻誦し、殺生の罪業を消滅しようと狩猟で獲った猪鹿の供養をする。日等公はこれらの禽獣にも徳を与えたことで仏の慈悲にも等しいということになる。そこで人はこの丘に次のような供養塔を建てて、佛ノ峯と呼んだ。

〈碑の正面の文字〉

南無妙法蓮華経 奉誦本門経応自我偈三千巻
右所志者欲為消滅於一生殺生之業而
所令誦之全文所念彫琢之石塔成也

この供養塔の左面の文字について、『満徳寺縁起』に書かれている内容が実際とは異なる部分がある。摩滅した文字もあるが、実際の文字の解明や違いが生じた理由については、今後明らかにする必要がある。

第一節 郷土芸能

横山盆踊（横山）

室町時代に伝わった「横山盆踊」は、江戸時代初期に起きた千代女と國隆の悲恋を題材に加え、その歴史的民俗的価値が注目されて、南種子町の「西之本国寺盆踊」とともに国が記録保存を必要とする無形民俗文化財となった。種子島の盆踊りは、かつて島内のあちこちで舞われていたが、現在も行われているのは二カ所のみである。「横山盆踊」の歌曲は六曲中四曲が慶賀の内容であり、二曲は恋を題材にしている点が特徴になっている。また「西之本国寺盆踊」は踊り手が自ら歌いながら踊るが、「横山盆踊」は歌い手と踊り手が独立している。歌曲同様に所作もきわめて静かで荘重である。全員がカムキという面をかぶって踊る。下野（二〇一〇）によれば、カムキは人の不浄な息がからないうような清浄さを保つたためのものである。踊り手もまた



国選択無形民俗文化財「横山盆踊」



千代女と國隆の碑

精霊なのである。

コサンダケに七夕飾りをつけた甲を先頭に鼓と太鼓と鉦が続き、そのあとに男踊りと女踊りが二列になり、左右交差するように入場する。男踊り役は大小の太刀を腰に差す。女踊りは花笠をかぶり、紫色の御高祖頭巾に小刀を一振り。全員シキ

ブの枝と扇子を腰に差す。服装は全員が白装束に白足袋である。数十人が円陣をつくり、静かに舞う。

最後の曲である引端は哀調をたたえた独特の旋律である。演舞が終わりに近づく頃になると、辺りは薄闇につつまれ、舞台を退く演舞者たちに忍び寄る影が、さながら國隆と千代女の悲しみが乗り移ったかのようなのである。

第二節 年表

和暦(西暦)		上西校区のできごと
文和元年 (一三五二)	初めて大崎に塩釜が建つ	
寛永5年 (一六二八)	日向国家老比志島宮内少輔國隆、家人四人とともに種子島に配流となり、横山に住む。後を追って愛妾阿久根千代女も種子島横山へ。國隆はこの年の十一月に切腹の命を受け、自死。千代女は殉死する	
寛永18年 (一六四〇)	成高山に伊勢神社を奉祀する	
宝永2年 (一七〇五)	日向国佐土原の家老朝山治右衛門高重は藩主の継嗣問題の責任をとり、種子島に配流され、横山に住む。父親の身を案じた娘は同行して、高重の死後も父親の墓を守り通した	
宝永7年 (一七一〇)	中国(清)の船が大崎浦に漂着	
文化11年 (一八一四)	島津藩筆頭家老久保平内左衛門之正は藩の財政立て直しを申し立てたが受け入れられずに種子島に配流。花里崎に住む。地元民と親しく交流するも一〇年後、切腹により自死	
文政7年 (一八二四)	大崎の浦にイギリスの帆船が現れる。長さ三〇間、帆柱三本帆は数十枚。斜立柱も備えており、逆風でも運航可能な大型帆船に人々は驚く。三日後に姿を消す	
明治 9年(一八七六)	第七十三郷校の支校が上西にできる	

和暦(西暦)	上西校区のびやうじ
11年(二八七八)	公立小学校となる
大 正	
3年(二九一四)	榕城尋常高等小学校に合併されて上西分教場として尋常科四年生以下の児童を収容する
昭 和	
16年(二九四二)	上西国民学校に改称
17年(二九四二)	伊勢神社はそれまで大花里の管理であったが、大花里からの要請により上西校区の管理下に置くことを区議会で決定
20年(二九四五)	太平洋戦争の激化により四月に大口市立平出水小学校に集団学童疎開。十月に帰郷する
22年(二九四七)	学制改革により上西小学校に改称(六年制)
39年(二九六四)	昭和十七年から始まった校地拡張と整備後、区民の努力が結実し、上西小学校の木造校舎が完成
41年(二九六六)	校歌制定。作詞は平山武章、作曲は林幸光
42年(二九六七)	南側新校舎竣工。コンクリート造二階建て
43年(二九六八)	へき地集会所(体育館)竣工
44年(二九六九)	大広野神社で下野敏見先生が銅鏡(小型海獣葡萄鏡など五面)を発見
46年(二九七二)	校庭の二本松がマツクイムシの被害を受けて一本伐採される。翌年最後の一本も伐採。上西小学校のシンボルを失う
51年(二九七六)	校庭に芝生を植える
57年(二九八二)	上西小学校創立百周年 北側新校舎落成。コンクリート造二階建て



献穀米の収穫作業(上)と儀式(下)
(昭和3年、横山、馬場重己氏提供)

暮らしの風景写真

和暦(西暦)	上西校区のびやうじ
58年(二九八三)	上西地区営農研修施設(区長事務所)落成
62年(二九八七)	伊勢神社下斜面に大規模なアスレチック施設完成
平 成	
11年(二九九九)	校庭にもアスレチック施設(レンジャー)完成
令 和	
3年(二〇二二)	花里崎下之平に遺跡が発見され、発掘調査が始まる
5年(二〇二三)	河口洋一郎氏、文化功労者に選ばれる



大広野の青田祭（昭和30年）



学校落成祝賀演芸会（昭和22年）



運動会のリレー
（撮影年月日不詳）



「全校風景」昭和29年「希望の鐘」（左上）
榎本常喜校長（右上）



上西小学校シンボルツリー センダン「希望の木」